

祭壇の再築 エズラ 3:1-6

1. イスラエル人は自分たちの町々にいたが、第七の月が近づくと、民はいっせいにエルサレムに集まって来た。そこで、エホツァダクの子ヨシュアとその兄弟の祭司たち、またシェアルティエルの子ゼルバベルとその兄弟たちは、神の人モーセの律法にかかっているとおり、全焼のいけにえをささげるために、こぞってイスラエルの神の祭壇を築いた。(3:1-2)
 - a. バビロンからの長い旅を終え帰還した人々は、エルサレムに神殿の再建をするという目的のため一つに集まった。
 - b. 物理的に一つの所に集まり霊的に一致することは、個人レベルで、また共同体として神の御心を行うにあたって不可欠である。イエスがこの地上で祈られた最後の祈りの中には信者の一致のための祈りがあった(ヨハネ 17:20-23)。
 - c. 神殿再建にあたり最初の命令はいけにえをささげる祭壇を築くことであった。それは自然のものと超自然的なものが交わる場所であった。
 - d. 今日ではいけにえをささげるための神殿や祭壇はない。イエスご自身が神殿であり、イエスとつながった私たち一人一人のからだに聖霊の宿る神の神殿となる。私たちのいのち生活そのものが日々神にささげるいけにえである。
2. 彼らは回りの国々の民を恐れていたので、祭壇をもとの所に設けた。彼らはその上で主に全焼のいけにえ、すなわち、朝ごと夕ごとの全焼のいけにえをささげた。彼らは、書かれているとおりに仮庵の祭りを祝い、毎日の分として定められた数にしたがって、日々の全焼のいけにえをささげた。(3:3-4)
 - a. 祭壇を築くことは神殿の再建にあたり欠くことのできないプロセスであり、おそらくもっとも大切なことであった。危険や反対があったのにもかかわらず祭壇は築かれた。あるいは危険や反対があったので祭壇が築かれたのかもしれない(祭壇は回りの人々からの危険を守るためだったともいわれる)。
 - b. 第一神殿が壊されイスラエルが捕囚の身となった原因が律法に不従順だったためだとしたら、書かれていることすべてに注意を払うのは当然であろう。
 - c. これは人間の性質であろう。世俗的なものであれ霊的なものであれ、何か新しいことを始める時には私たちは非常に気を遣うが、時間が経つにつれて次第に注意を払わなくなる。そもそもイスラエルがこの苦境に追い込まれたのは神の言葉を守らなくなったことにあった。今の時代のクリスチャンにも同じことが言える。私たちはいつも注意を払っているだろうか？
3. その後、常供の全焼のいけにえと、新月の祭りのいけにえと、主の例祭のすべての聖なるささげ物、それからめいめいが喜んで進んでささげるささげ物を主にささげた。彼らは第七の月の第一日から全焼のいけにえを主にささげ始めたが、主の神殿の礎はまだ据えられていなかった。(3:5-6)
 - a. 礼拝の中心はささげものである。私たちは大切なものを犠牲としてささげる。あなたの心が本当に礼拝しているものが何か知りたければ、あなたがささげているものの内容を見ればよい。
 - b. イエスが十字架で死なれ、私たちにはもはや旧約のいけにえの制度は必要なくなった。ただしそれは神が心から礼拝する者をご覧になっていない、ということではない。
 - c. 主にあって成長すると日々の生活、日々の犠牲の中にそれが表れてくる。主のうちに成熟するとはどれだけ長い間クリスチャンになっているかということではなく、どれだけ神に明け渡しささげているか、ということである。